

## 都市伝説の韓日比較

島村 恭則<sup>※</sup>

### はじめに

都市の日常生活の中で起こるさまざまな奇怪で不思議な出来事についてのうわさ話を主たる内容とした、いわゆる都市伝説<sup>1)</sup>の調査研究は、アメリカ民俗学においてすこぶるさかに行なわれてきているが<sup>2)</sup>、その影響も受けつつ、日本民俗学においても近年この領域の研究がさかんになりつつある<sup>3)</sup>。

これに対して、韓国においては、都市伝説として把握することのできる事例は数多く存在するものの、これらを収集し分析する民俗学的研究は、管見の限りでは皆無のようである<sup>4)</sup>。だが、都市伝説の研究は、都市化する現代社会の世相や心意を捉える上で格好のテーマであり、また日本など隣接諸国との比較民俗学的研究という観点からも興味深い主題であるから、韓国においてもこの領域の研究が開始されることが待たれるものである。

そうした状況をふまえ、筆者は先頃、韓国の都市伝説について事例の収集を試み、かなりの成果をおさめることができた。そこで本稿では、そこで得られた資料を用いて、韓国の都市伝説について概観し、その特徴について、韓日比較の視点から若干の検討を試みようとするものである。

取り上げる資料は、大邱にある啓明大学校の日本学科学生(45名)が口承文芸論講義の学期末レポートの中で報告したもので、提出された話の総数は161(ただし、この数字には、異なる報告者(学生)によって報告された同じ類型の話の重複も含まれている)である。同講義は筆者が行なったもので、ここではア

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

メリカと日本の都市伝説研究の動向について概説し、また都市伝説の調査法についても十分なオリエンテーションを行なった。したがって、それをふまえてのレポート作成であったため、提出されたレポート群は、学術資料としての引用にも耐えうる、質量ともにかなり充実したものとなっている。

### 1 祭祀

#### [事例1]

夜、タクシー運転手がマンウリ共同墓地で白い素服を着た若い女性の客を拾った。運転中、運転手がミラーを通して後部座席の客を見ると、その女性は見えたり見えなかったりした。目的地に着くと、客は「お金がないから家から持ってくる」と言って降りていった。しかし、いくら待っても戻ってこない。そこでその家に行く。すると老婆が出て、「その女は私の娘です。でも娘は5年前に事故で死んでいます。今日はちょうど、その子の祭祀(チェサ)の日です」。(1990年に、通っていた高校で友人から聞く)

この「消える乗客」型類型の話は、合計4話集まった。そのうち3話までが、[事例1]同様、事件が起こったのが、消えた乗客の祭祀(チェサ)の日であった、と語っている。祭祀とは韓国における儒教式の祖先祭祀儀式で、ふつう忌祭・墓祭・茶礼の3種類<sup>5)</sup>が行なわれている。消える乗客の話は、アメリカや日本にも多く[Brunvand 1981][牧田 1985][松谷 1985b]、そのストーリー展開の構造も韓国のもと同ーであるが、その日が祭祀の

日であった、とする事例はそこにはない。アメリカ・日本に、祭祀（チェサ）がないから当然ではあるが、韓国の場合、この話の中に祭祀が登場してくるのが特色だといえる。

ただ、ここで留意しておくべき点の一つある。それは、韓国においては、祭祀を受けることができるのは結婚をし子供（とりわけ男子）を残して死んだ男女に限られるという理念があり、一般にはその理念どおりに儀礼が実修されているという点だ。

【事例1】では「5年前に事故で死んだ娘」が未婚で死んだのか否か、あるいは既婚であっても子供を残さないで死んだのかどうかの言明はなく、また、この事例以外の残りの類話二つでも、消える乗客は若い女であるが、ここでもその女が未婚で死んだかどうか、子供を残さないで死んだかどうかの言及はない<sup>6)</sup>。言及がないから未婚で死んだか否か、子供を残さないで死んだかどうかはわからないのだが、未婚で、あるいは子供を残さないで死んだ可能性を否定することはできないだろう。しかし、だとすると叙上の理念と語りの内容との間に矛盾があるということになる<sup>7)</sup>。これをどう考えるか。

筆者は、この場合における理念や一般的実態との矛盾は、この話がフォークロアであり、事実そのものではない限りにおいて、話者達にとってはとくに気になることではないのだろうと考える。「死者の霊出現の時空といえは祭祀である」。こうした観念は、のちにあげる【事例2】【事例3】【事例4】などの存在からもわかるように、韓国では一般的であり、したがって細かい矛盾の有無は気にかげられることなく、またそもそも死んだ「娘」が未婚だったか否か、子供を産んでいたか否かをはっきり語ることなく、とにかく祭祀の時空に霊が出現した、とする語り方がこの種の話にはもっともふさわしいものと受けとめられているのだと考えるべきであろう。フォークロアとはそのようなものだ。

霊の出現を祭祀の日に設定する話は他にも多い。

### 【事例2】

スンジャとオスクは同じアパートに住む親しい友人である。スンジャは14階に住み、オスクは1階に住んでいる。試験の前日、二人は14階のスンジャの家で夜遅くまで窓を開けたまま熱心に勉強していた。スンジャは自分の家なのですぐ眠気がさし、ほどなく眠ってしまったが、オスクは眠気がささなかったのですずっと勉強していた。

夜12時30分ごろ、オスクが数学の最後に残った問題を解いていた。すると、開いている窓の外におばあさんが来て、「1402号室はどこなの」と聞いた。オスクはつい自分が今1階の自分の部屋にいるものと勘違いして、「あっちのエレベーターに乗って14階で降り、その向こう側にあるのがその部屋ですよ」と答えた。それからまた問題を解いていると、またさっきのおばあさんが来て「その家じゃない」と言った。オスクは、「いいえ、きっとその家ですよ」と言い、自分も眠気がさしたのでそのまま眠ってしまった。

翌朝、オスクは目覚めたとたん、びっくりした。なぜならここは1階ではなく14階で、窓の外は地面ではないし、ベランダでもなく、虚空であることに気付いたからだ。オスクは夜中のことをスンジャに話したが、彼女は信じなかった。また、学校へ行って友達にもこのことを話したが、やはり彼らも信じなかった。

学校から帰って見ると、自分の机の上に餅が置いてあった。オスクは「おかあさん、何よこれ」と母に聞くと、母は答えた。「知らなかったの。ゆうべは1402号室のおばあさんの祭祀（チェサ）の日だったのよ」。(2年前に友達から聞いた。この話の舞台となった場所はわからない。このような話は2、3年前に若者の間で流行った。なお、他の内容は全く

同じであっても、人名は話し手によって異なっている)

この話では、窓辺に出現した老婆が、実は虚空に浮く霊であったというところに怖さを求めると同時に、結末部で、その霊出現が老婆の祭祀の日であったとしているところに特色がある。

次の事例も祭祀の日に出現した霊の事例。

### 【事例3】

大邸のあるスーパーに、夜の12時頃、腰の屈んだおばあさんが入ってきた。そのおばあさんによると、息子の家に晩ご飯を食べさせてもらおうと思ってやって来たが、息子達の家族はみな早く寝てしまっていて晩ご飯を食べさせてもらうことができなかった。それで腹が減って仕方がないのでパンを買って食べようと思ってやって来たのだという。おばあさんはパンを買い、その場でおいしそうに食べてから5千ウォン札を出した。そこで店員がお釣りを渡すと、おばあさんはどこかへ去って行った。

翌朝のことである。店員がその5千ウォン札を見てみると、それは落葉であった。そしてこの話を店に来る客達にしていると、隣家の人が、それはうちの亡くなったおばあさんに違いないと名乗りをあげた。隣家では、前の晩はおばあさんの祭祀(チェサ)の日であったが、午後8時頃に早々と祭祀を済ませ、早く寝てしまったのだという。(1994年4月、母から聞いた。大邸で実際にあったことだという)

祭祀は伝統的には、故人の命日の午前0時に開始するものとされてきたが、今日では開始時間を2時間とか3時間あるいは4時間と、早めて行なうケースも多くなってきている。これは祭祀に集まる人々の世俗的時間の都合を考慮してのものであるが<sup>8)</sup>、これだと日付

が命日に変わる前に祭祀が行なわれることになり、本来、命日に行なわれるべきものが行なわれないということになってしまう。【事例3】は、そのような、祭祀開始時間を早めた場合に、命日の午前0時という旧来のしきたりどおりの日時にやって来た霊が祭祀を受けられなかったために起こったとされるもので、現代韓国文化における伝統と現代とのズレが都市伝説として表現されたものであろう。あるいはさらに、人々の伝統改革に対する躊躇あるいは不安の産物であるともいえるかもしれない。

ところで、祭祀を行なう際は、表門とか窓など、いろいろな門を開けておくことになっている。これは、祭祀対象である祖先が、祭祀を受けるために門を通して家の中に入ることができるようにするためである。ところが、門を開けておくことを忘れてしまった家があった。次の事例がその家の話である。

### 【事例4】

大邸のある家で、家族・親戚が集まって亡くなったおばあさんの祭祀(チェサ)を行なったが、祭祀を開始すると、外で犬が騒々しく吠えはじめた。人々ははじめは無視していたが、あまりにも激しく吠え続けるので不思議に思って外に出てみた。すると玄関のドアに何か人間のようなものがぴったりとくっついている。それは紫色の着物を着、顔色は白かった。そして人々がもっと近付いて顔をよく見ると、なんとそれは死んだ祖母の顔であった。みんな驚いたが、主人が、玄関のドアを閉めたまま祭祀を行っていたことに気付き、あわててドアを開けた。すると、その紫色の着物を着たものは消えてしまった。そして犬も吠えなくなったという。(誰から聞いたかははっきりと覚えていない。この話はかなり前から知っている)

このように、祭祀の場に来る霊については

かなりリアルに語られている。筆者が出会った韓国人の中には、祭祀の最中に、亡くなったおじいさんやおばあさんがやってきて饗応を受けている姿がこの目に見えたことがある、と語ってくれた人も複数おり、韓国社会においては祭祀の日の霊出現はかなりリアリティーのあるものとして認識されているようである。上に並べた事例などは、こうした認識に支えられて広く根強く語られているのである。

## 2 学校

都市伝説がしばしば学校生活を舞台に語られることは日本の場合と同様、韓国においても顕著である。

### 【事例5】

韓国の学校にはトイレに関する話がたくさんある。有名なのが卵鬼神（タルギャル鬼神）の話だ。トイレの戸を開けると、中から卵鬼神が「イーヒヒヒー」と気持ちが悪い笑い声をたてながら、赤い爪を持ち上げてこちらを睨みつけてくるというのである。（幼いころ友達から聞いた）

### 【事例6】

ある女学生が、学校のトイレの、横並びになっている個室の一番最後（奥）のトイレに入っていた。すると、誰かがやって来て一番最初のトイレをロックし、中に誰もいないとわかると「あっ、いない」と言い、トントントンという音をたてながら隣のトイレの前にやってきてドアをロックする。そこにも誰もいないとわかるとやはり「あっ、いない」と言い、トントントンという音をたてて次のトイレに移る。そのようにしてついには女学生の入っているトイレの前までやって来た。女学生は、とても怖かったが一体誰がやってきたのだろうかと思って、トイレのドアの下側の隙間からそっと覗いてみた。すると「あっ、

いる」という声。隙間を通して学生とその不気味な者の目があったのである。女学生は気絶してしまった（死んでしまったともいう）。音をたててやってきたのは卵鬼神（タルギャル鬼神）という鬼神で、体の形は卵、細い足がついている。頭と足とが上下逆さまになっており、頭の部分が床をトントントンと叩きながら歩くというものであった。卵鬼神は、結婚しないで死んだ女が鬼神となったものだという話も聞いたことがある。（これらの話は祖母に聞いた）

### 【事例7】

あるとき二人の学生がトイレに入った。一人は用事をすませたが、もう一人は出てこない。そこで待ちくたびれたほうの学生は、もう一人の入っているトイレの戸を開けてみた。すると中で、卵鬼神（タルギャル鬼神）が友達を食べているのではないか。驚いて声も出なかった。卵鬼神は、「腹がいっぱいになったのでお前は食わない。今見たことは絶対に秘密にしろ」と言った。それでその学生は卵鬼神と約束をしてトイレを出た。しかし、このときのことを誰かに話したくてたまらなかった。

その後、ある日、クラスの人々が運動場に出て、その学生ともう一人の学生が教室で留守番をすることがあった。そのとき、その学生は、トイレでのことを話すか話さないか迷った末、結局横にいる学生に話してしまった。すると、横の学生は、「話すなど言ったのに！」と叫んだ。（弟から聞いた）

これらトイレに出る卵鬼神（タルギャル鬼神）の話は、現在50歳代の人でも、かつて子供の頃に聞いたことがあると筆者に述べている。したがってかなり古くから語り継がれているポピュラーなものだといえよう。こうしたトイレに鬼神（妖怪）が出るとする観念は、卵鬼神の事例こそないものの、日本の事例群にも多く認められる。学校のトイレに妖怪が出

るという話は多いのだ<sup>9)</sup>。この場合、トイレは学校空間の秩序の中では曖昧で混沌とした空間であり[常光 1993:20]、また「この世とあの世の靈魂の出入口」[宮田 1979:42]という意味を持っているがために、さまざまな怪異が語られるわけだが、この点で、トイレの怪異が多く語られる韓日両国は、そこに見られる民俗心意に共通するところがあるといえよう。

怪異が語られるのはトイレだけではない。次のような事例がある。

#### 【事例8】

ある学校に舞踊教室に関するすごく怖い話が広がっていた。それは夜12時になると、舞踊教室に鬼神が出るといううわさであった。それで学生達はもちろん、先生達も何年かの間、日が暮れてからはその舞踊教室を使用しないようにしていた。ところが、新学期になって赴任してきた舞踊の若い女の先生は、舞踊教室に関する怖い話を聞き、自分が鬼神がいないことを明らかにすると行って一人でその舞踊教室で一夜を明かすことにした。日が落ちて暗くなるとその先生は小型カセットを持って舞踊教室に入った。初めは怖いという気がしなかったが、12時になると怖くて震え上がるようになった。それで彼女はカセットのボリュームを上げ、音楽に合わせて鏡に映る自分の姿を見ながら得意になって踊りを踊りはじめた。そして怖さを忘れようと夜明けまで踊り続けた。やがて夜が明け、彼女は何もなかったかのように教室の外に出てきた。彼女を心配していた先生や学生達が集まってきたので、彼女は「鬼神なんかいるものか。12時になっても何も見えなかったわ。むしろ、私は音楽にあわせて鏡を見ながら楽しく踊りを踊ったわ」と言った。この時ある学生が青くなって女の先生に言った。「先生、舞踊教室には鏡がないんですよ」。(23歳女性のクラスメイトから聞く)

この話については、複数の学生が類話を報告しており、中には怪異の起こる教室は美術教室で、先生も美術の先生となっているものもあるのだが、ともかくいずれにしろ舞踊教室や美術室という、普通教室とは異なる特別な教室に怪異が発生しているわけである。日本の学校で怪異が発生するとされる場所は、常光徹によれば「理科室、音楽室、体育館、トイレといった特別教室や付属の施設に片寄っているという傾向がある」[常光 1993:2]が、韓国の場合でも、[事例8]およびその類話はもちろん、他にも音楽室や美術室を舞台にした別の話が多数筆者のもとに報告されており、先に指摘したトイレの場合と同様、怪異発生の場所をめぐる心意に韓日の共通性を指摘することが可能であろう。

ところで、以上のような韓日共通の心意にもとづく事例群とは別に、韓国の学校都市伝説の特徴を示すと思われる話も多く存在する。それは、「苛酷な受験戦争」と結びつけて語られる事例群である。

#### 【事例9】

韓国では今、大学受験のあり方について、今のままの教育制度ではいけないとよく言われている。私が高校生だったときも、大学に入るため、勉強ばかりしていた時代であった。それで、自分の成績を悲観して自殺する学生が多かった。一つの社会的な流行りで、自殺者が増える一方であった。「幸福は成績の順位ではない」という映画も出たりしたのであった。

私は大邱駅のうしろにあるY女子高等学校を卒業したが、これから話すことは3年生の5月に起こった。

私がある日学校へ行くと、運動場が人で一杯で救急車も来ていた。どうしたのかと友達に聞くと、受験のことを苦にしたある学生が、明け方、学校の講堂のてっぺんから投身自殺をしたのだということだった。そしてその学

生は私と顔見知りで、私は彼女がとても素直な人だと思っており、自殺するなどは夢にも思わなかった。

ところでその学生には仲良しの友達があったが、彼女は、友達が自殺したその日に次のような夢を見ていたそうである（この夢を見たときには、まだ友達が自殺したことを知らないのであった）。問題の友達がバス停留所に立っている。それであいさつをしようと声を掛けるが返事がない。また、おかしなことには校服を着ないで白い着物を着ている。バスが来ると、友達が自分の手を引いてそのバスに乗った。ところがそのバスが普通のバスと異なっていた。路線名を示す番号板がなく、乗客も運転手さんも友達も皆同じ白い着物を着ており、自分だけが校服を着ているのであった。それで、あまりにもおかしいので、自分はそのバスから降りた。朝、起きると、その夢が生々しく頭の中に残っている。そして登校してみると、夢に出た友達が自殺して死んでしまったことを知らされたのである。

この話は学校中に広がって皆、不思議だと思った。私は、私の夢にもその死んだ友達が現われたらどうしようと、恐ろしかった。（死んだ学生とその友達は3年2組で、私は1組であった。この話は2組の友達から聞いた）

この事例は自殺の事例だが、受験戦争が引き起こす殺人について語られることもある。

#### [事例10]

倭館にあるJ女子高等学校での話。10数年前、この学校には優等生が二人いた。一人はいつも1等をとって、もう一人はいつも2等をとっていた。それで2等の学生は1等の学生に嫉妬をし、ある日学校の屋上から1等の学生を落として殺してしまった。その翌日、教室のその女学生の席は空席となっていたが、夜間自習時間に2等の学生がガラス窓を通して教室の中を見たら、いないはずの女子学生

が自分の机で勉強している姿が見えた。その2等の学生はそのとき以後気が狂って、どこかで交通事故にあって死んでしまったそうである。（1989年5月、後輩である大学1年生の女性から聞いた。この話は彼女が問題の高校の3年生であったときに流行ったものという）

殺された1等の学生の話は広く語られているようで、同モチーフの話は筆者の手に4話集まっているが、中には殺された学生が再来する場面が、より手のこんだものとなっているものがある。

#### [事例11]

ある学校（名前はわからない）に、いつも1等だけをとる学生と、いつも2等だけをとる学生がいた。2等をとる学生は、どんなに熱心に勉強しても1等をとることができなかった。それでいつも1等をとる学生に対して、嫉みと憎しみで一杯であった。

ある日、正規の授業が終わった後で、この二人の学生だけが残って勉強していた。数時間後、1等の学生が窓辺に立って休んでいたが、このとき、2等の学生は自分でもわからないうちに1等の学生を押ししてしまった。1等の学生は下に落ちて死ぬ。その後、2等の学生はいつも1等をとることができるようになった。そして、かなりの日数が経ち、この学生は自分の罪を忘れたまま学校に一人で残って勉強していた。すると、廊下の遠くのほうから、「ゴロロ、ドン」という音が聞こえ、それがだんだん近付いてくる。学生は怖くなってトイレの中に逃げた。だがついに音の主はトイレの中までやってきた。学生は、音の主は一体何だろうと思い、トイレの戸の下の方にある隙間からそっと覗いてみた。するとその学生はそのまま気絶し、死んでしまったという。「ゴロロ、ドン」という音は、死んだ1等の学生が、学校の中を2等だった学生を探して回っているときに出る音であった。なぜ、

「ゴロロ、ドン」という音かという、校舎から落ちるとき頭から先に落ちたのだが、死後もそのままの姿勢で、足ではなく頭が床を「ドンドン」叩きつつ体が「ゴロロ」と転がって来るからであった。そして、学生が気絶したのは、下から覗き込んだ彼の目と、上下逆さまの死者の目とがぴったりとあったからである。この話は、韓国の大学入学のための「競争」があまりに激しいことから生じた話だと思ふ。(1988年、友達から聞いた)

[事例10] では、ガラスを通して死者を見たのであったが、[事例11] では、トイレへの逃避および思いがけない姿勢をした死者との遭遇など、怪談としてより手のこんだものとなっている。こうした、いわば話の成長も見られるほどこの話は広く語られているようであるが、ここで気付くのは、トイレにおける「思いがけない姿勢をした死者との遭遇」のモチーフは、[事例6]にある、トイレにおける上下逆さまのタルギャル鬼神との遭遇のモチーフと同一のものであるということである。このモチーフは死者・鬼神との遭遇の場面を語る際に好んで用いられるものなのだろう。

次いで、点数至上主義の非情な先生の話もある。

#### [事例12]

〇〇高等学校の1年生である〇〇さんは、美人である生物の先生に片思いをした。しかし、その生物の先生は、生物の試験で50点以上とったことのない〇〇さんを叱るだけだった。それでこれを悲観した〇〇さんは自殺してしまっただけでなく、〇〇さんが死んだことを知ってもこの先生は眉一つ動かさなかった。そして「わたしは間違っていないわ」と冷たく言いながら、出席簿にある〇〇さんの名前の上に赤い線を二本引いた。翌日、この先生が仕事を終えて退勤するとき、校門の

前に誰かが立っている。後ろ姿が〇〇さんのように見えたので、まさかとは思いつつも名前を呼んでみた。振り返ったその人の顔には赤い線が二本引かれていた。(友人に聞く)

ところで、この種の事例が報告される際、語りと同時に、報告者である学生自身による解釈—これは受験戦争が原因で発生した事件・話だとする解釈—がとりわけ強調されているのに気付かされる。[事例9]と[事例11]がそうだが、他にも次のような報告を見付けることができる。

#### [事例13]

韓国は高校のときの受験戦争がとても激しい。私が高校に通っている時には、夜10時まで学校で強制勉強をしなければならなかった。こういうふうに夜遅くまで勉強させられることが原因になって出来た話がある。

ある女学生が夜遅くまで勉強し、家に帰る時間は11時を過ぎていた。家はアパートの15階にあり、毎日一人でエレベーターに乗って15階まで上がっていた。ある日、いつものようにエレベーターに乗り、15階のボタンを押してじっとしていたところ、他に乗り降りする人もいないのにエレベーターは2、3、4…14と各階にとまった。彼女はとても気味が悪かった。それで、母に、「明日からは1階で待ち合わせをして一緒にエレベーターに乗ってください」と頼んだ。翌日、約束どおり母と一緒にエレベーターに乗ったが、おかしなことに母は身動き一つしないのであった。それでも無事15階に着いたので、女学生は母に、「やはりお母さんと一緒だから大丈夫ね」と言った。すると母が静かに耳元で応えた。「まだ私があなたのおかあさんに見えるの?」。横に居るのは鬼神だったのだ。(高校生の時、誰かから聞いたというよりも、あちこちでこの話を耳にした)

この事例などもその典型なのだが、こと受験戦争に関わる（と報告者である学生が考える）話には、他の話を報告するときに比べてメタ・フォークロア的言説が付されてくることが多いのである。これは、学生自身が受験戦争のごく最近の当事者であったために、この種の話が報告され、あるいは語られる際には、彼らの受験に対する思いがとりわけ強く噴出してくるためであろう。

なお、[事例13]の場合、報告者のコメントに従えば、このエレベーターの話も受験戦争という文脈に位置付けられることになるが、そうすると、この話における「母」の登場は示唆的である。韓国の母親達における過剰なほどの教育熱についてはよく知られているところであるが<sup>10)</sup>、そうした背景をふまえた場合、母と考えていたものが実は鬼神であったとするこの語りには、受験をめぐる母子関係の葛藤を読み取ることができるかもしれない<sup>11)</sup>。

さて、ここで日本との比較を行なうと、韓国のほうが日本以上に受験の悲劇を強調する傾向がある。松谷みよ子[1987]、常光徹[1993]、飯島吉晴[1991]など、日本における学校の都市伝説についての資料とつきあわせた場合、日本側の資料には前掲[事例5][事例6][事例7][事例8]に類するような話が比較的多く、受験戦争の悲劇は強調されていない。それは、韓国の大学教員である松尾孝雄[松尾 1993:60]が、韓国人学生達との接触の体験をもとに「日本の大学受験など韓国に比べたら何ということない」とその印象を語り、また評論家の呉善花[1994:80]も具体例をあげつつ、「韓国の受験戦争、点数競争のすさまじさは、およそ日本の比ではない」と述べていることなどと呼応するものであろうか。ただし、この問題に関しては現時点では印象論にとどまるうらみがあり、受験戦争の実態の比較を含め、これ以上の論述は今後の課題としたい。

なおまた、もう一点だけ付言しておこう。

啓明大学校の兪玉姫教授、釜山工業大学の張相彦教授の御教示によれば、両教授の学生時代には、学校の怪談というと[事例5][事例6][事例7]のような話が好んで語られていて、[事例9][事例10][事例11][事例12][事例13]のごとき、受験戦争の過熱が強調されたり、そこで自殺や殺人などが語られるような話は聞くことがなかったという。このことはおそらく、学校の怪談が世相を反映して変遷してきていることを意味するものであろう。この点についての実証的論証も今後の課題としたい。

### 3 女性

女という性について語る話群にも注目させられる。

#### [事例14]

いつのことかはわからないが、昔、あるタクシー運転手が朝一番のお客として女性を乗せることになった。そのとき、不思議に一日の最初の客として女性を乗せることに気が進まなかった。しかし客であるから断らず、目的地まで乗せて行き、その後はいつもどおりの営業をしていた。しかし、夕方になり、この運転手は交通事故を起こし人を殺してしまった。数ヶ月後、再び最初の客として女性を乗せた。その日は収入が全然なかったし、気分も良くなかった。また、夜には酒に酔った客が理由も無しに喧嘩をふっかけてきて、結局2週間くらい入院するはめになった。

このようなことがあってから、この話が運転手達の間で伝えられ、以後運転手達は朝一番の女性客を絶対に乗せないようになったのだという。この話をしてくれたのは私の友人で、彼は以前タクシー運転手をしていたことがあるが、やはり朝一番の女性客は絶対に乗せなかったそうだ。(タクシー運転手だった友人から聞く)



まず [事例14] は、タクシー運転手達が、朝一番の客として女性を乗せることを嫌っていることについての話。ほぼ同様の話例はもう1話報告されている。実は、この種の知識は都市伝説というよりも、「商店・食堂・タクシーで、朝一番の客が女性だとその日の売り上げはよくない（あるいは、よくないことが起きる）」といった俗信として一般的な知識となっており、それをいくらかでも起源に遡って説明しようとしたのが（あまり説得力のある説明にはなっていないのだが）[事例14]であるといえる。

この種の都市伝説ないし俗信は、管見では日本ではそれほど顕在化して語られているようには思われないが、しかし、たしかに大阪府堺市在住のある話者は、タクシーに関して全く同様のジンクスがあると述べており、全く存在しないわけではないようだ。とはいえ、この種の語りが社会において広く共有されているというのは日本には見られない状況であるといえる。韓国（男性）社会の女性観が表象された話例として [事例14] を位置付けられよう。

次に、女性の生理と怪異とを結びつけた話例も5話報告されている。

#### [事例15]

韓国動乱（6・25）が終わってから2～3年後、慶尚北道安東郡でのことである。ある月の明るい晩であった。兄嫁の父が軍隊を退役し家へ帰る途中、そのときは交通が不便なので自転車を借りて乗って行ったのであるが、人家の一軒もない山道で突然白装束の女が現われ、「いっしょにあなたの家の前まで乗せて行って下さい」と頼んだ。それで後ろに乗せ家に向かった。ところが家に着くとたちまち自転車の後部が軽くなり、後ろを見てみると女性は消えてしまっていたという。翌朝、表門を見てみると、そこには血が着いて擦り切れた箒があったという。（兄嫁の父から聞く）

#### [事例16]

20年前のある雨の夜、20歳の女性が友人に誘われて外出した。ところがなかなか帰ってこないで、翌朝その女性の母親が探し回った。すると田圃で娘が気絶しているのを発見した。そして娘の側には黍でできた箒が立っていた。その箒には血が着いていた。箒が友人に化けて娘を誘ったのだ。韓国では箒を立てることと生理中の女性が箒をまたぐことを禁忌としている。なぜならば生理の血が箒に着くと、その血を通して女性の気が箒に付着し、箒が生きもののように動き出すからである。（親戚のおばさんから聞く）

代表例は [事例15] [事例16] で、女性の経血（の気）が箒に感染すると箒が鬼神化するというもの。他の事例群も、シチュエーションは異なるものの、経血+箒=鬼神のモチーフは共通するものとなっている。この類話が日本においても存在しているかどうかは、現時点では今後の確認に委ねざるをえないが、経血に特別な意味を付与し、また箒を呪具として用いたり、神格化したりする日本の民俗文化の脈絡とも相通じる伝承であるということとは指摘できよう。

なお、[事例15] は、第1節で見た [事例1] のような「消える乗客」型話例の自転車版といえるもの。あるいはこれは、韓国における「消える乗客」型話例の古態といえるものかもしれない。

## 4 軍隊

男子に兵役の義務がある韓国においては、学校と並んで軍隊も、都市伝説の舞台あるいは伝承母体・伝承経路として特記されるべきものとなっている。

#### [事例17]

この話は、私が軍隊に入隊し、新兵訓練を終えて1987年3月、ある部隊に配置されて北

韓との休戦線付近で勤務していたとき、古参兵から聞いたものである。また、この話は数十年にわたって古参兵から新参兵に語り伝えられてきているものである。

休戦線が江原道楊口郡のある場所を通っているが、その場所にあるバンカー（地下に設置される軍事用の監視室のこと）を焼肉バンカー（プルコギ・バンカー）という。ここからは、風が吹き雨が降る夜ごとに誰かが泣いているような声がした。それで我々はそこに行くのを憚っていた。ここについての話は次のとおりである。

1950年代までは休戦線には堅い鉄柵はなかった。それで南北ともに相手の部隊に回し者を侵入させることが容易であったという。ある日、民間人を装った北韓の回し者がこの焼肉バンカーの付近に侵入した。韓国軍側は、民間人だと考えて何の疑いも抱かなかったという。ところがその日の夜、その回し者が焼肉バンカーにやって来て、中にいた3人の韓国軍兵を火炎放射器で焼き殺したという。それで、焼肉（プルコギ）を料理するとき、やはり肉を火で焼くために、ここを焼肉バンカー（プルコギ・バンカー）と名付けたのだという。

本文中に、この話は（数十年にわたってかどうかはともかくとして一というのもこの話の中の事件が事実なのかどうか、あるいは1950年代当時にすでにこの話が語られていたのかどうかを確認することができないからである）「古参兵から新参兵に語り伝えられてきている」とあるように、明らかに軍隊内部で伝承されるフォークロアである。軍隊のこの種の伝承は、この事例を報告した学生をはじめ、復学生（大学を休学しての軍隊勤務を終え学窓に復学した学生）達によれば、軍隊内できわめて豊富に語られているのだという。

次の事例もそうしたものの一つであるが、とくにこの事例の場合は、既存の伝承を前提

としつつ、自らがさらに不思議な体験をし、それを語っているというもの。

#### [事例18]

この話は私が1989年7月、軍隊にいたとき実際に体験したことである。

私は1989年1月に軍隊に入った。そして同年3月に慶尚南道の東海岸沿いの町にある部隊に勤めることになった。そこには三光物産の工場があったが、その工場は数年前に火事で焼け、当時は骨格だけが残っていた。そしてその火事でその寮に住んでいた女性達がたくさん死んだということであった。それでその死んだ女性達の霊がそのあたりを漂っているという噂があったので、夜になると大変怖かった。また、それに関するいろいろな噂話が古参達の口から伝えられてきていた。

そしてある日のことである。中隊長と私の乗ったジープが118（勤務地のナンバー）を通過したあと、118から20メートルくらい前に光が見えて、それが少しずつ近付いてきた。小隊長が来たのかと思ったが、その光は118のすぐ前で消えてしまった。それで勤務交替をして小隊本部に入ってその話をしたところ、やって来たのは小隊長ではないという。なお、中隊長もその光を見たとのことだった。この他にも、その工場は夜には中から変な音がしたり、外からは光が見えるが中に入って見ると何もないということがときどきあった。たぶん、そこには火事のときに死んだ人の霊が漂っているに違いないと思う。

また、次の事例は、軍隊内での珍しい体験として報告されたもの。

#### [事例19]

この話は私が軍隊にいるとき（1989年9月～1992年1月）のある夏の出来事である。またこれは私が直接体験したことである。軍部隊は江原道鉄原郡の山麓にある。部隊では猫

と犬を一匹ずつ飼っていた。この猫と犬に餌をやる兵士もいた。真夏のある日、猫と犬があまりに汚かったので、ある兵士が猫と犬を洗ったが、その後、乾かすために脱水機に入れて回転させてみた。それから外に出したが、珍しくも何回かクルクル回ったあとで、すぐ真っすぐに歩いて行った。その後も、私が除隊するまでに2、3回このようなことがあった。しかしいずれのときも、猫と犬は脱水機のものすごい速さでも死ななかった。

この体験談から想起されるのはアメリカの都市伝説における「オープンに入れられたペット」型の話である。そこでは生きものを生きたままオープンや電子レンジに入れてしまうとうどうなるか、が語られているわけだが<sup>12)</sup>、[事例19]の場合、「オープンに入れられたペット」のような類型的・伝承的な話にはなっていないものの、そうしたフォークロアを生み出す母体となりうるような体験であるといえよう。今のところ韓国における「オープンに入れられたペット」型のデータは筆者のもとにはないが、軍隊における日常とは異なる生活の諸相、「珍しい体験」が種々のフォークロアを生み出す母体となってくる可能性があるかもしれない。この点の検証が今後の研究課題の一つとなろう。

ところで、軍隊での体験や伝承は、軍隊の外でも語られ、伝承されてゆく。

#### 【事例20】

故郷の親しいお兄さんが軍隊に入っていたときに起こったことを何年前に聞いた。そのお兄さんは空輸部という最も難しい訓練をする部隊に所属していた。

さてある日、その日も休戦線の近くの山の中で難しい訓練を終え、眠りについた。その場所はお墓の近くだった。眠っていると、何かがしきりに彼を引っ張るような感じがした。それで朝起きてから自分の寝ていたところを

掘ってみた。するとそこから形の崩れた死体が発見されたのである。お兄さんによると、たぶん6・25戦争のとき死んだ誰かの死体だろうということだった。

この事例は、軍隊に行っていた「故郷の親しいお兄さん」が女学生にかつて語ったものであり、ここから、明らかに軍隊内部から外部へとフォークロアが語り伝えられるのだということが指摘できる。

また、軍隊そのものを舞台とした話ではなく、よく巷間で耳にする類の都市伝説が軍隊内でも語られ、さらにそれが軍隊の外に対しても語られ伝承されてゆくことになる例もある。そういう話が報告される場合は、たとえば「この話は軍隊に行っているサークルの友達から聞いた。昨年、彼が夏休暇をもらって軍隊から出てきたときに私達に話した話で、彼はこの話を軍隊の先輩から聞いたそうである」などと註記されているのである。

したがって、以上のような事例群をふまえると、都市伝説の主要な伝承母体・伝承経路として軍隊を指摘することができる。ただ、現時点では遺憾ながら軍隊内における伝承の場やメカニズムについての詳細はまだわかっておらず、この点、今後の調査に期待したい。

なお、現在軍隊の存在しない日本においては叙上のごとき伝承状況は存在しないのであるが、ただ、かつて軍隊が存在した時代においては軍隊のフォークロアが盛んに語られていたわけで [松谷 1985]、それらと韓国における現在およびかつての軍隊のフォークロアの比較検討は重要な課題となろう。また、現今の日本の自衛隊やその他諸国の軍隊間のフォークロア比較もいずれは手懸けられるべきであろう。

## 5 風水

韓国においては風水地理が今日でも人々の生活の中で大きな力を持っている [朝倉

1990]。以下にあげるのは、それが都市伝説として表現されてきた事例である。

#### [事例21]

慶尚北道の道庁のあるところは、風水地理上の好地、明堂である。なぜここに道庁の庁舎が建てられたかという、この明堂の地に庁舎を建てれば、以後30年にわたって慶尚北道・大邱の周辺から政権を握る人物が出る、という風水地理家による予言を道庁が受け入れたからである。建設してみると、たしかに以後の歴代大統領は朴正熙（1963就任）にはじまり盧泰愚（1993年退任）に至るまで、ぴったり30年間、大邱周辺の出身者（いわゆるTK<sup>13</sup>）によって占められていた。しかし予言どおり、それは30年以上は続くことなく、盧泰愚の次は慶尚南道巨濟出身の金永三にとって替わられたのであった。（大学の友人から聞く）

#### [事例22]

盧泰愚政権は、政権末期になって多くの問題に直面したが、これは、彼が、生地の周囲にある八公山を、統一薬師大仏を建立するなどして開発し、ここに道路を造ったため、彼の運気をささえている八公山の気を減退させることになり、大変困難な政権末期を迎えることになったということである。（大学の友人から聞く）

風水関係の話で多いのは、こうした政治家やあるいは実業家の隆替にまつわる話である。ここにあげた以外にも多くの政治家・実業家について種々語られている。

ところで、[事例22]に出てきた八公山は大邱の風水地理上重要な山で、ここについては次のような話が語られている。

#### [事例23]

近年、八公山の頂上から、日政36年時代に

朝鮮総督府が打ち込んだ鉄パイプが発見された。これは、韓国の生気を根こそぎそぐために、朝鮮総督府が韓国中の風水重要山の頂上に打ち込んだ鉄パイプの一つだという。最近、登山客のグループなどが各地でこの鉄パイプを発見し、騒ぎとなっている。（大学の登山部に入っていた兄から聞く）

こうした話は事例中にもあるように、各地の名山について存在するらしい。今回の資料収集では、（風水に限らず）日本による植民地政策にまつわる話は、本事例しか出てこなかったが、それはたまたま資料として上がってこなかったにすぎず、韓日の複雑な関係が都市伝説として語られるケースも存在するものと予測され、今後の調査を期したい。

次に、風水が個人の住宅の善し悪しを語るフォークロアに持ち出されている例をあげてみよう。

#### [事例24]

慶尚北道永川郡清通面雨天洞には「不思議な家」と呼ばれる家がある。この家は2年前にある警察官が建てて住んだ家だが、夜な夜な夢枕に白い韓服を着た女性が現われ、「ここは自分の家だからあなた方は出て行きなさい」と言う。それで彼は、とてもここには住めたものではないと言って、この家を他の人に安い値段で売ってしまった。次に入居した人も、やはり同じ夢を見る。そこでその人は易者を訪ねてこの夢のことを相談した。易者によれば「その家は風水で、大地の気が強すぎるので、力の強い人間数人と体の大きな動物と一緒に住めば、問題なく住むことができる」ということだった。しかし、その人は結局、自分が住むのは嫌で、他人に家を売ろうとした。だがこの家の噂は広く広まってしまっていて、買い手が見つからない。それで現在もこの家が誰も住まないまま残されているのだ。（1993年の秋夕のとき、この付近を車で通過中、母

がこの話をした)

こうした住宅風水や、あるいは墓地の風水に関わる話は、韓国の民間社会に枚挙に暇がないほど存在するようであり、民間への風水知識浸透の根強さを思い知らされるものである。とはいえ、以上掲げてきた話は、専門の風水家に語らせればより複雑なディテールを持ったものとして説かれるものであろう。が、一般の都市伝説として流布する場合は上に提示してきた程度の語られ方になるのである。

ところで、この風水の都市伝説をめぐって日本の状況と比較した場合、日本においては政治家に関わるフォークロアなどに風水が持ち出されることは一般的ではないといえる。これは日本(本土)の民間に風水がそれほど流布してはこなかった[渡邊 1994:35]ことを示すものに他ならない。ただ、[事例24]のごとく家の善し悪しをいうフォークロアは日本にも多い。とはいえ、そこではいわゆる家相に関する陰陽道の知識が云々されはしても、[事例24]に見られるようにそれを「風水地理上」のことに明言するケースは管見では一般的ではないと予想され、そこに差異を指摘できる。これも、風水知識の浸透の度合いの差によるものであろう<sup>14)</sup>。

### 結びにかえて

以上の検討をまとめると、本稿の段階では、韓国の都市伝説の特徴—とりわけ日本との比較を考慮した場合の特徴—として次の5点を指摘しようということになる。

- ① 霊出現の時空を祭祀に求める事例が顕著である。その際、伝統的祭祀規範からの逸脱、祭祀をめぐる伝統と現代との葛藤が語られている点などにも注目させられる。
- ② 学校生活を舞台とした話が多い。その場合、それが「受験戦争」の苛酷さと結び

つけられて語られていることが目立つ。

- ③ 韓国(男性)社会における女性観を表象した話例が見られる。
- ④ 軍隊を舞台、あるいは伝承母体・伝承経路とする話が少なくない。
- ⑤ 風水地理の善し悪しをモチーフとするフォークロアが発達している。

もっとも、こうした特徴が認められるとはいえ、微細な差異を含みつつも日本の事例に類似する話例も少なからず存在しており、日本の都市伝説との関わりの深さも予想される。35年にわたる日帝による植民地支配下の状況や、在日韓国人あるいは近年顕著になりつつあるニュー・カマーズによる伝播・伝承上の媒介などを考慮すれば、韓日間に相互影響関係がないというほうがおかしい。ただその場合、具体的な伝播の実態については現時点では何もわかっていない。

なお最後に、中国を含めた韓日中の都市伝説をめぐる比較研究が期待されるが、中国に「聊天」「都市新伝説」なるジャンルが存在することは確認されているものの、現状では、ごく一部[加藤 1990]を除いて笑話的なもの以外の都市伝説の資料化はなされておらず[加藤 1991]、本格的な比較研究は全て今後の課題となっている。

### 註

- 1) 「都市伝説」の用語の規定は、[宮田 1991:73]によるものとする。
- 2) 代表的なものに、[Brunvand 1981]がある。
- 3) 代表的なものに、[宮田 1991]、[常光 1993]がある。
- 4) 韓国においては、都市伝説に限らず、都市民俗に関する研究は、その必要性を強調する概論の類[朴 1992:441-451]はあるものの、具体的な研究成果はほとんどないようである。
- 5) 忌祭は、祭主の父、祖父、曾祖父、高祖

父の四代父系直系尊属親について、喪の期間が過ぎた後のそれぞれの命日に家庭で行なわれる。墓祭は、5代祖以上の祖先に対してふつうは陰暦十月に墓所で行なわれる。茶礼は忌祭の対象となる祖先に対して、ふつう四季の名節（年中行事）に家庭で行なわれる（以上は〔朝倉 1989 : 121-143〕による）。

- 6) タクシー運転手が訪ねて行った家が若い女の実家なのか婚家なのか（実家なら家の中から出てくる女性—〔事例1〕では「老婆」—は実母で、婚家なら姑ということになる）についてははっきりした言及も、類似する3話いずれにおいてもなされていない。
- 7) ただし、祭祀対象者に関しては、現実にはかなり複雑なようである。朝倉敏夫によると、理念上はともかく「現実の慣行においては、正式な祭祀が行われなくても、例えば未婚の子が死んだ場合でも、その両親が生きていて主祭者の間は、親の感情として子の祭祀をしてあげるといような例がみられる」〔朝倉 1989 : 129〕という。ただしその場合、「未婚の子」に女子が含まれるかどうかは朝倉の記述では不明であり、崔吉城がやはり祭祀対象者について「例えば未婚の男子が死んだ場合には、一時的だが父母や兄が祭祀を行なう場合があるが、処女の場合はそうではない」〔崔 1992 : 202〕と述べていることからすると、そうした例は男子に限られたことかもしれない。とはいえ早急な断定は控えるべきで、今後よりいっそうの実態調査が進められる必要がある。そしてその際には、本論であげたような若い女の祭祀についてのフォークロアとの関わりについても検討がなされるべきである。
- 8) このように0時になる前に祭祀を始めるケースのほか、0時を経過して故人の命

日になってから、その日の夕刻（6時とか7時、8時）に祭祀を行なうというケースも増えてきている。これだと、命日に祭祀を行なうことができるわけである。ただし、この場合は旧来の開始時間よりも18時間以上遅れて祭祀が開始されることになるわけで、やはり伝統的なしきたりとの間に齟齬が生じることに変わりはない。

- 9) 〔常光 1993〕に多くの事例が出ている。
- 10) 日本語でこれについて紹介したものに、〔呉 1990 : 172-175〕がある。
- 11) ただし、この点に関しては、フリーライター金のウィソンも、「学校の怪談」についてのエッセーの中で〔事例13〕と同様の話を取り上げ、そこには、受験生達にとって自分を抑圧する最も中心的な構造の一つの軸である「母」についての象徴が存在すると述べている〔金 1994 : 66〕ので註記しておく。なお、金のエッセーは民俗学の学術論文ではないが、現代韓国で語られている「学校の怪談」をとりあげ、その意味するところを探ろうとしており、数少ない韓国都市伝説関係の文章として参照に値する。
- 12) 〔Brunvand 1981〕にこの類型の話が収められている。典型的な例を次に掲げておく（訳文は〔同書〕の日本語版による）。おしゃべりがとぎれた時、シェリー（彼女はニューヨークのロングアイランドの出身である）がこんな話をしてくれた。ある奥さんについて聞いた話だという。その奥さんはプードルを飼っていて、いつもオープンを使ってその犬を乾かしていたという。ある日、彼女は電子レンジを買った。そして、プードルをレンジに入れて乾かそうとした。もちろん、プードルははじけてしまった。〔ブルンヴァン 1988 : 105〕
- 13) TKとは韓国における地縁ないし学縁を意

味する言葉で、Tは大邱を、Kは慶尚北道あるいは慶北高校を意味する [服部 1992:156]。

- 14) 少なくとも奈良朝期以後の日本の伝統建築には風水思想に似た設計プランがあったにはあったのであるが、今日の日本本土の人々はそのことをすっかり忘れており、伝統家屋の設計プランを、風水思想によるものだとは言わなくなっている [渡邊 1994:91]。民間一般で家の善し悪しに言及する際に「風水地理」が直接持ち出されることがないのは、このことと関連しよう。

### 【参考文献】

- 朝倉敏夫 1989 「韓国の位牌祭祀」『祖先祭祀』(渡邊欣雄編)、凱風社
- 1990 「韓国の風水研究—その回顧と展望—」『民俗学の進展と課題』(竹田旦編)、国書刊行会
- 飯島吉晴 1991 『子供の民俗学』 新曜社
- 池田香代子他編 1994 『ピアスの白い糸—日本の現代伝説—』 白水社
- 呉 善花 1990 『スカートの風』 三交社
- 1994 『向かい風』 三交社
- 加藤千代 1990 「中国世間話研究への試み」『文化人類学』 8
- 1991 「中国の『都市新伝説—男と女の話を読む—』『口承文芸研究』 14
- 金ウイソン 1994 「韓国版『学校の怪談』」(呉輝邦訳)『韓国庶民生活苦勞嘶』(仁科健一他編)、社会評論社
- 島村恭則 1995 「韓国の都市伝説—韓日比較の視点から—」『日本学誌』 15
- 崔 吉城 1992 『韓国の祖先崇拜』 御茶の水書房
- 常光 徹 1993 『学校の怪談—口承文芸の展開と諸相—』 ミネルヴァ書房
- 服部民夫 1992 『韓国—ネットワークと政治文化』(東アジアの国家と社会 4)、東京大学出版会
- 朴 桂弘 1992 「都市民俗学」『増補・韓国民俗学概論』 蜆雪出版社
- 牧田 茂 1985 「民俗学の対象としての『世間話』」『昔話—研究と資料—』 14, 三弥井書店
- 松尾孝雄 1993 『韓国女学生人間学』 亜紀書房
- 松谷みよ子編 1985a 『現代民話考』 2 (軍隊), 立風書房
- 1985b 『現代民話考』 3 (偽汽車・船・自動車の笑いと怪談), 立風書房
- 1987 『現代民話考』 7 (学校), 立風書房
- 宮田 登 1979 『神の民俗誌』 岩波書店(新書)
- 1991 『怖さはどこからくるのか』 筑摩書房
- 渡邊欣雄 1994 『風水—気の景観地理学—』 人文書院
- Brunvand, Jan Harold.  
1981 The Vanishing Hitchhiker : American Urban Legends and Their Meanings. New York : Norton
- ジャン・ハロルド・ブルンヴァン  
1988 『消えるヒッチハイカー—都市の想像力のアメリカ—』(大月隆寛・重信重彦・菅谷裕子訳)、新宿書房、([Brunvand 1981] の日本語版)

### 付記

本稿は、既刊の拙稿「韓国の都市伝説—韓日比較の視点から—」(『日本学誌』 15, 啓明大学日本文化研究所紀要)に若干の補訂を加え成稿したものである。したがって、重複が見られるが、日本では目に触れられる機会が少なく、また入手も困難なものとなっている。このことを考慮し、敢えてここに本稿を発表するものである。